複雑な交通事故の真相を、独自の緻密な手法で解明してきた交通事故鑑定人、駒沢幹也氏（77）の事件簿からの新シリーズ。第5話はバイク事故。事故は「若者の暴走」の結果だったのか。警察の処理に疑問を抱く親たちは、執念で証拠を集め、「真相」を求める闘いを始めた。

「息子はバイクで死んだ」真相を求める親の執念

「親が子を思う気持ちと　のは、本当にすごいものだね。私のところへ駆け込んでくる相談者の大半は、子供を交通事故で亡くした親たちだ。親を亡くして相談に来る子供なんて、ひとりもいない……」

駒沢氏はしみじみと語る。

わが子が命を落とした事故現場へ毎日のように通いつめ、写真を撮り、目撃証言を集め続けた親。

血のりのついた息子のヘルメットや衣類を裁判に備えて今も大切に保管している親……。

これまで駒沢氏が扱ってきた事件の中には、警察が発表した事故原因に疑問を抱いた当事者の両親が、必死になって証拠をかき集め、それがきっかけとなってまったく新たな真実の解明に結びついたという例も少なくなかったという。

「そんな親たちの熱意と、やり場のない訴えを聞くと、気の毒でね。なんとか力になってやりたいと思うんだ」

駒沢氏は鑑定業務から引退した現在も、どうしても断ることができなかったいくつかの事件にかかわり続けている。

◇

「『寒いから、帰りは車に乗せてもらったほうがいいよ』。彼は、ヘルメットをかぶろうとした私にそう言いました。それからわずか十分後です。あの事故が起こったのは……」

松田みどりさん（三）は、婚約者を亡くした三年前の夜のことを振り返る。

一九九一年三月三十日、中山浩二さん（当時二十歳）は、みどりさんを含めた友人四人と自宅から数キロ離れたボウリング場でプレーを楽しんでいた。

帰り支度を始めたのは、午後十一時ごろ。行きは自分のバイクの後部座席にみどりさんを乗せていたが、寒さを気づかい、帰りは一緒に行った友人の車に彼女を乗せて、浩二さんはひとりバイクで家路についた。

途中、バイクと車は二台そろって赤信号で停止。そして青に変わって発進したすぐ後、事故は起こった。

後ろの車の助手席に座っていた友人の川田君は語る。

「ゆるやかなカーブにさしかかったとき、前を走っていたバイクのブレーキランプが突然光りました。次の瞬間、浩二君の体が高く飛び上がったのです。センターラインをオーバーして走ってきた対向車とぶつかったんだ！僕はとっさにそう思いました」

友人たちはすぐに車から降りて浩二さんに駆け寄り、救護した。

「私は足がガクガク震え、寒くなりました。『浩二、浩二』と呼んでも返事はありません。右手の中指から血がど

短期連載

続 交通事故ホームズの事件簿5

ジャーナリスト 柳原三佳 やなぎはらみか

んどん流れ出していたので、ハンカチを取り出して手首をギュッとしばりました。周りを見渡しましたが、事故の相手らしき人はいませんでした」（みどりさん）

「僕も、相手の人は何をしているのだろうと思いました。事故を起こしたらすぐに負傷者を助けるのが運転者の義務じゃないか。でも、それらしい車は見当たらない。これはひき逃げだ、と思いました」（川田君）

結局、救急車が浩二さんを運んでいくまでの間、現場には事故の相手の車もドライバーの姿もなかったと、四人は語った。

◇

「私たちが病院に到着したとき、息子はまだかすかに意識がありました。でも、大きく腫れたおなかと口から流れ出す血を見て、これはかなり悪い状態だと直感しました。痛みは強く、五人で体を押さえても押さえきれないほど。死の苦しみとはこういうものなのかと思いました。祈りました。どうか助けてください、命だけはと」

父親の中山正さん（㊧）と母親の光子さん（㊧）は、必死で祈った。

しかし、それもむなしく、事故からわずか一時間半後、浩二さんは息を引き取った。

みどりさんとの結婚、そして新居への引っ越しも翌月に決まり、家族じゅうが喜びに包まれていた。そんな矢先に起こった、最悪の出来事だった。

事故の原因は死者の一方的過失とされた

病院の廊下には、警察官に連れられてきた事故の相手と名乗る四十代の男性が立ちすくんでいた。横ではその妻らしき女性が「すみません、すみません」と泣きながらわびていたが、その場では警察から詳しい事情を聴く余裕はなかった。なにより、浩二さんの遺体を自宅に連れて帰ることが優先だった。

ところが、翌朝の新聞、テレビ、ラジオなどでは、この死亡事故が以下のように報道されたのだ。

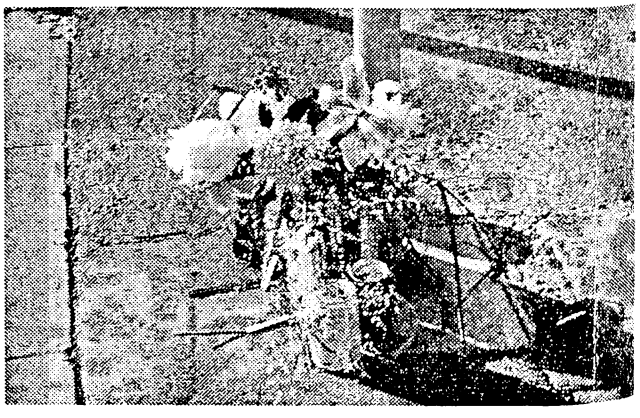
「中山浩二さん（二）のオートバイと、会社員（㊧三）の乗用車が正面衝突。中山さんは内臓破裂で死亡した。警察署の調べでは、中山さんがスピードを出しすぎていたためハンドル操作を誤り、対向車線に飛び出したらしい」

相手の車のセンターラインオーバーが原因で起こった一時的な「ひき逃げ」事故だと思いこんでいた中山さん夫妻や友人たちは、浩二さんの一方的な過失とした警察の発表に納得できないまま、本通夜を迎えたのだった。

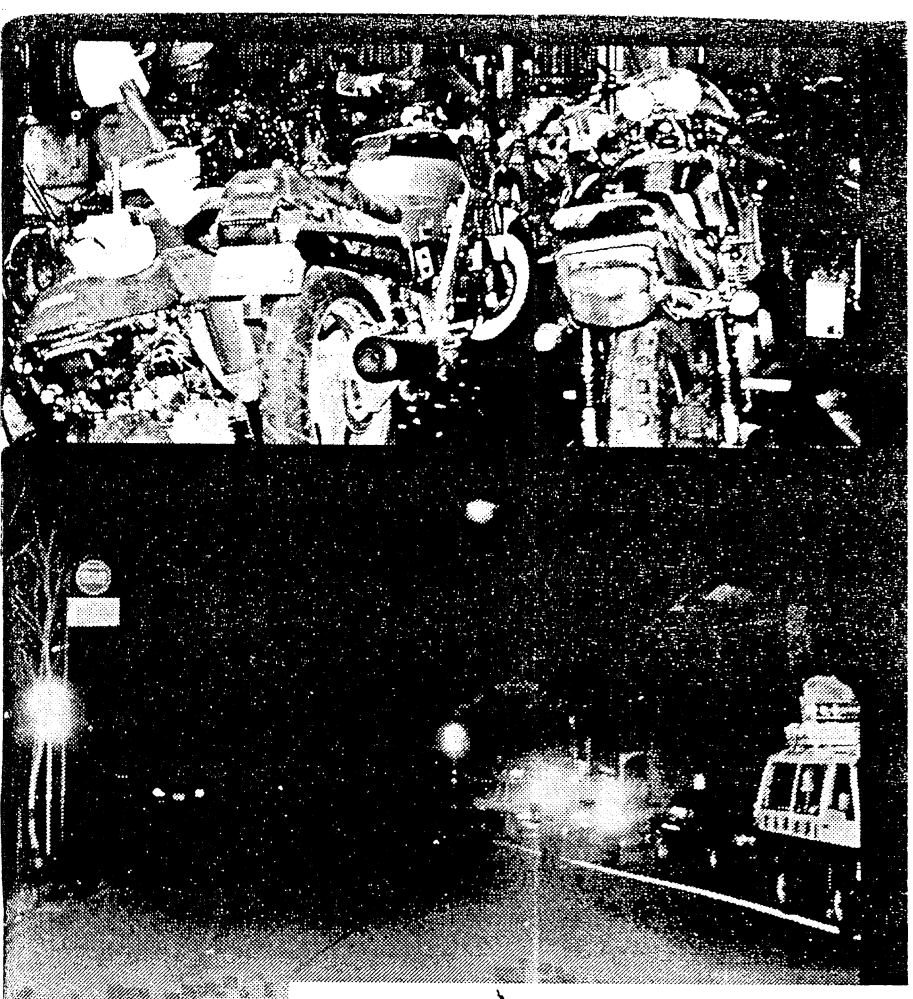
◇

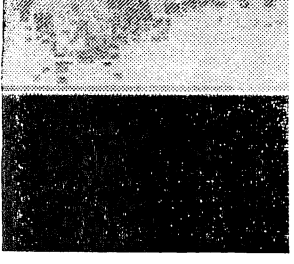
四十九日が過ぎたころ、両親は会社員を相手に民事訴訟を起こすことを決意した。

「息子が対向車線へ飛び出したという絶対的な証拠が見当たらなかったからです。それに、バイクのブレーキ痕が衝突地点の約十㍍手前からはっきりと残されていたのです。本当に息子は対向車線に飛び出したのか？　なぜフルブレーキをかけなければならなかった



事故現場に供えられた花





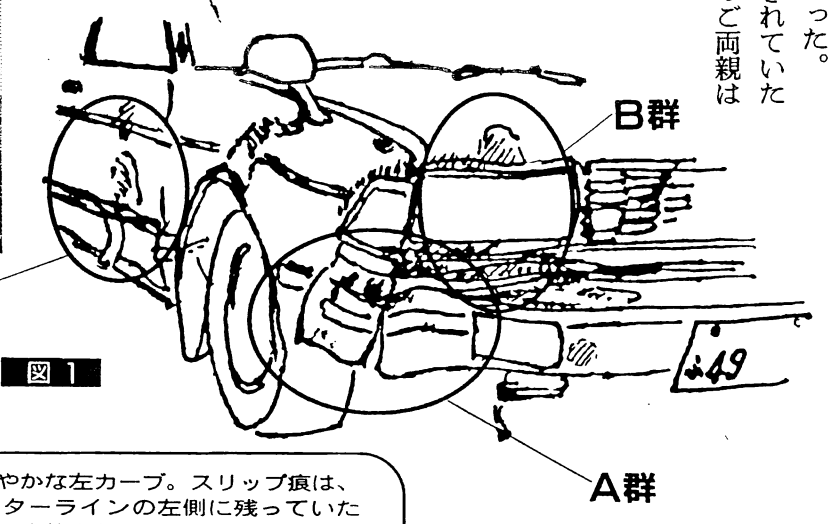


図1

現場はゆるやかな左カーブ。スリップ痕は、消えたセンターラインの左側に残っていた（写真下）。事故を起こした乗用車の表面にはバイクのクラッチレバーやジャンパーのファスナーの跡が刻み込まれていた（上図）

のか？　そして真夜中、警察は現場検証をどこまで正確に行えたのか？　私たちにはどうしても割り切れませんでした。おまけに会社員は事故を起こす前、居酒屋でかなり酒を飲んでいたという事実も明らかになっていたのです。そんな状況のなかで勾留も、たいした取り調べも行わずに、なぜ息子ひとりだけが悪者にされるのでしょう？　警察に何度も事情を聴きに行ったのですが、検証も行ってくれませんでした」

中山さん夫妻はどうすればよいのかわからないまま、交通事故に詳しい弁護士などに相談した。

◇

駒沢氏のもとへ鑑定依頼がきたのは事故から約四カ月後のことだった。

「とにかく証拠が完璧に残されていたのには驚いたね。中山さんのご両親はこの事故の真実を明らかにするために、息子の衣類や乗っていたバイクはもちろん、相手の会社員の事故車まで大切に保管していたんだ。あらかじめ業者にたのみ、スクラップにまわされたところをすぐに押さえて譲ってもらったそうだが、その熱意には頭が下がる思いがしたよ」

思い出すのがつらいという理由で、早々に事故車を処分する遺族は少なくない。双方の事故車を実際に合わせながら鑑定を行えるなど、めったにないことだった。

事故の瞬間を刻んだ傷が保存されていた

駒沢氏は中山さん宅を訪れ、両親の見守るなか、二台の事故車と浩二さんがその日、身に着けていた衣類のキズをひとつひとつチェックしていった。

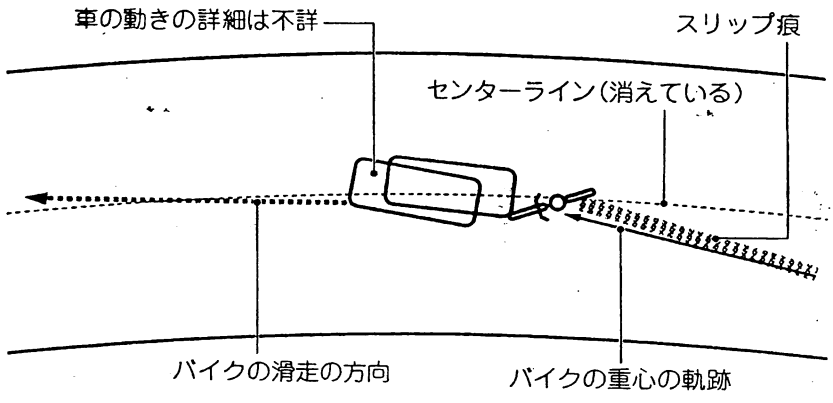
「初めに接触した個所は、車のバンパー右前部とバイクのフロントホイールだ。このキズはバイクのクラッチレバーでこすられたもので、こっちのキズは浩二君が着ていたジャンパーのファスナーの跡。ほら、かたちがぴったり合うだろう？　車の塗料もちゃんと残っているよ」

数々のキズ（図1）は、明らかにその瞬間を刻んでいた。

さらに駒沢氏は、浩二さんが衝突の間際につけた長さ約十㍍、幅約七㍍のブレーキ痕の写真を分析。そのときのバイクの動きも再現した（図2）。

「浩二君は少なくとも一秒以上手前で対向車の動きに危険を感じ、急ブレーキをかけている。しかし、後輪をロック

図2



させた状態では駆動がかからず、ハンドルをきっても左へよけることができないので、とっさにブレーキを解除した。その瞬間に衝突が起こったんだ」

鑑定書にはブレーキ痕とバイクの動きが、順を追って描かれていた。

「つまり浩二君は、最後の瞬間までブレーキとハンドルを使いながら必死で迫りくる危険を避けようとした。対向車線に飛び出したなんてとんでもないよ。飛び出してきたのは、会社員の運転する乗用車のほうさ。ほんの一瞬タイミングがずれていれば、浩二君は間違いなく逃げきれたはずなのに……」

駒沢氏は悔しそうに語った。

事故から三年以上経過した現在も、裁判は続いている。

「この事故は、二十年間愛し育てた息子の最後の出来事です。だから親として、どうしても真実を知りたい、ただそれだけなんです」

浩二さんの母親は、涙をいっぱいにためてそう語った。

◇

「現場に駆けつけた人間の先入観が、事故処理を大きく曲げてしまうことがある」

と駒沢氏は指摘する。

「たとえば、バイクと車の事故。バイクは十代の若者が運転し、車は四十代のまじめそうな会社員が運転していたとしよう。そうしたらね、それだけで多くの人が『どうせバイクのやつが飛ばしてやがったんだろう』と推測してしまうわけだ。べつに悪気があるわけじゃない。でも、その安易なイメージが事故処理を初めから偏ったものにし、事故原因の取り違えを生み出してしまうことがよくあるんだ」

確かに、無謀な運転をする若者は多いし、幼い子供は飛び出しをする危険性が高いかもしれない。しかし、その先入観がすべての事故にあてはまるとは限らないのだ。

「事故処理に主観はいらない。まず、事故車や現場に残された客観的証拠を探し、そのキズをよむことが第一だ。それをせずに、先入観や一方の当事者の言い分だけで事故原因を発表するなど、もってのほか。意識不明になったり、死んでしまったら、その人は言葉で反論することはできないのだから」

「この事故は正面衝突なんかじゃない」

わが子を交通事故で亡くした親からの鑑定依頼は、後を絶たない。

今井良平さん(当時二十四歳)は、小学校教諭。二年前の秋、通勤途中に事故にあった。前出の中山浩二さんと同じく、「バイクを運転中に誤って対向車線へ飛び出し、前から来た乗用車に衝突、即死した」と発表された。そして、事故の形態はバイクの一方的過失によるもので、自賠責の死亡保険金もいっさい支払われないと判断を下された。

ところが、どうもおかしい。正面衝突と報道されたのに、バイクにはそれらしきキズ跡が見当たらないのだ。

「今井さんの両親が私のところへ相談に来たとき、彼らは何百枚という山のような写真を見せてくれた。現場、バイク、相手の車両、それぞれがいろんな角度から実に完璧に撮られていた」

駒沢氏は写真の束と数冊のアルバムを私に見せた。

「実はね、この事故は正面衝突なんかじゃない。今井さんは相手の車に後ろから追突され、投げ出されたところをひかれたんだ」

両親が現場に通いつめて撮影した写真の中には、事故の真実がしっかりと刻まれていたのだ。

「死人に口なし、一方の当事者の言い分だけを鵜のみにした最悪の事例だ。現場検証を行った者はなぜ、こんなにたくさんのはっきりした証拠に目をやらなかったんだろうね? 必ずひっくりかえしてやるよ」

駒沢氏はいま、この事件についても、「鑑定人としての卒業論文のつもり」で取り組んでいるのだという。

◇

突然の交通事故で失った最愛のわが子。もう二度と帰らないことはわかっているのに、それでも必死で証拠をかき集め、つらい争いを続けなければならない親たちのせつなさ……。

駒沢氏のこの怒りが、事故処理にかかわる多くの人々に届くことを願うばかりである。

(つづく)

(本文中、事故の関係者は仮名です)